

# 青春の軌跡

## 牧草 泉

一通の手紙が来た。それは高校時代の友人からだった。「一度会いたい」と書かれていた。友人DとKの連名だった。「いまさら、どうしてだよ？」俺はそう思った。俺たち三人は夜間高校一年のときに同じクラスになった。互いに昼は仕事を持っていた。だから付き合いは学校と下校時だけだった。互いに爆発するようなりビドウに翻弄されていた。会えば当然のように女の話へと落ちていった。俺は思った。「あいつら二人はリビドウをうまくコントロールしているな。リビドウの奴隷となっているのは俺だけだ。あいつら、オナニーだけなのか？」俺の精神は今にも分解しそうで不安だった。たまたま、体育の教師が授業中、「お前たちは青春のリビドウをうまく昇華するんだ。三木清やカントだってそうだ」と言った。体育の教師の口から出てくるセリフではなかったので、今でも鮮明に記憶している。俺はこの教師のアドバイスを賭けた。そうしてカント、バーク、ニーチェ、マックス・ヴェーバー、ヘーゲル

フロイトなどの著書を購入した。しかしほとんど理解できなかった。訳文自体が難しかったのだ。主部と述部探しに追われて時間が流れた。

ある日たまたまDとKが遊びに来た。いつものようにエロ話に落ちていったが、ふとDがリング箱製の書棚を見て、「あれっ、お前こんなものを読んでいるの？」と『エドモンド・バーク研究』を取り出した。俺は答えた「買っただけだ。読んでも分からない。積ん読だ」Dはしばらく本をめくっていたが、突然、「お前、読まないんなら俺に貸してくれ」と言った。すると、Kもまた一冊の本を引っ張り出すと、「俺はこれを借りるぞ」と言った。『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』だった。否応なしだった。二年になるとクラスは分かれた。三人の付き合いも途絶えた。二人は借りていった本をいつまでたっても返すことはなかった。俺も少しは気になったが、読むつもりもなかったので放置した。

俺はあいつも変わらずリビドウに支配されていた。俺は決断した。学校の帰りに顔を合わせる女のところに行つた。女はいつも飲み屋の入り口で客を誘っていた。俺が帰宅しているとき「まじめに勉強してる？」、「風邪引かないようにね」などと激励してくれた。俺は女の生業は知っていた。しかし女を不潔だと思ったことは一度もなかった。女は、俺の願いを拒否した。俺は粘つた。学校は必ず卒業

するんだと言つた。女は最後に折れた。「それって、絶対に約束できる？」これが条件だというように女は念を押した。女は優しく俺のリビドウを緩解してくれた。女が耳元で囁いた。「卒業したら、いい人見つけるのよ」俺は返事をする代わりに女の胸元に顔をうずめた。そうして思つた。「こんな世界もあったんだ」と。俺は女に感謝した。ある日、女は言った「卒業したらどうするの？」俺はまだそんなことは考えていなかった。「もうそろそろ目標を持つ必要があるわよ」この夜が女と会つた最後だった。女の行方は誰も知らなかった。俺にとつて女は聖母マリアだった。女の優しさを思い出すたびに涙が溢れた。俺は別れの悲しみを知つた。

俺は女と約束したとおり心を入れ替えた。昼は洋服屋で下働きをしながら必死で頑張つた。DとKが進学を目指していたことも、俺の勉強に拍車をかけた。

俺は名古屋のN大学でディケンズを専攻、大学院を修了すると、恩師の引きで故郷の大学の講師になった。

しかし、俺にはこの仕事は向かなかつた。いつも何かに縛られていた。講義に縛られ、人間関係に縛られ、とても窮屈だった。ディケンズの研究は何も組織の中になくてもできるのでは？ そう思つた。まさにハムレットの心境だった。その矢先、先輩が大学の准教授を辞して民間の翻訳会社に転職した。先輩は言つた「俺って、アカデミズム

の世界は向いていないんだ」と。結局先輩に倣つて俺も大学を辞めた。恩師は「君には教師の仕事が一番適している」と言つて止めた。しかし俺は翻意しなかった。俺は心で泣いて恩師に詫言つた。

俺は英文学とは無縁の測量士の資格を取ると、小さな事務所を立ち上げた。しかし営業は苦手だった。その上規制緩和のために、経営にはいつも四苦八苦した。

Dは優秀だった。東北のT大に進みそのまま母校の教授になった。そうして『大陸国と島嶼国の外交』という著書を出版、マスコミにも頻繁に顔を出して、日本の外交に警鐘を鳴らして啓蒙し続けた。

一方、Kは地元のS大学を出ると、東京のW大の大学院に進んだ。社会学を専攻して、都内の中堅大学に職を得た。准教授時代に、『植民地主義における被支配者の位置』という論文を公にして、学会に新風を吹き込んだ。

俺は一介の測量屋。片や彼らは著名な大学教授。俺は会いたくなかつた。卑屈になりそうだった。でも会わないと卑怯者だ。しばし悩んだが、俺は会うことにした。彼らの今日あるは俺のおかげなんだ。俺の本が彼らを今日あらしめたんだ。俺は彼らにとつては恩人なんだ。そう決めつけると俺は一人微笑んだ。そうして、決してあいつらに負けないぞと心に誓つた。そのとき、ふと、女の悲しげな表情が目の前に浮かんだ。俺は思わず眼を伏せた。